

平成21年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

分類 番号	B3	取組 名称	京都・北山杉の里集落の文化的景観とその再生活用のための基礎的研究
研究代表者： 生命環境科学研究科 教授： 大場 修			
研究担当者： 京都府立大学（生命環境科学研究科・講師・田淵敦士（敬称略）） 外部分担者・協力者（京都府農林水産部林務課林主査・柴田 繁、アトリエ RYO 一級建築士事務所所員・近 仁裕、京都府京都林務事務所主査・岩田義史、京都市森林組合理事（中源商店代表取締役）・中田 治、ほか）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府農林水産部林務課，京都府教育庁文化財保護課，京都市文化財保護課，京都市森林組合など			
【研究活動の要約】			
<p>本研究は、林業を生活基盤とする京都市北山地域に特有の建築群により形成された中川地区（京都市北区中川北山町）の集落と景観を取り上げ、地場産業である杉磨丸太生産との関係を軸にその特徴や地域性、歴史性を検討し、集落景観の独自性と歴史的、文化的価値を明確にすることを目的に取り組んだ。</p> <p>そのために、集落内の建物調査およびヒアリング調査を多数実施し、集落の建築と景観の特徴を検討した。特に、集落景観を特徴付ける杉丸太小屋については、その構造特性についても、専門的な解析を事例的に実施し検討した。</p> <p>あわせて、北山杉の磨き丸太に関わる林業の現状と課題を総括し、今後の展望を探るとともに、杉丸太小屋の今後の活用に向けて、その基本的な考え方と方向性について検討し、その概略を示した。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>1、中川地区の伝統的な民家は、大火以前の北山型の民家形式が大火後も踏襲されており、しかも主屋は殆どが南向きの妻入形式であることから、当地区の民家は近世から近代にかけても北山型の古い形式が長く保持されたことがわかった。また、大火後の民家ではその正面妻面に装飾的な梁組みや漆喰の鏝絵が見られるのも特徴である。このような妻面の装飾化は妻入形式が長く継承されたため、北山型の近代民家の特徴として注目される。</p> <p>2、明治以後、大火を経てもなお妻入が踏襲されたのは、集落が斜面に形成され細長い宅地形状の下で主屋が立地するという立地条件によるものと判断される。それゆえ、結果的に北山型民家の古形式が長く保持されたと考えられる。</p> <p>3、さらに、中川地区の丸太乾燥小屋は北山杉の丸太を建物の内外部に立て掛けて保管し乾燥させる施設として工夫された造形で、とりわけ軒下に並べる杉丸太を雨から守るために発達した長い庇は、この建物に独特の外形を与えている。北山杉丸太の乾燥小屋は、全国的にも類例を見ずその存在はきわめて珍しく、特に、川に沿って長く建ち並ぶ乾燥小屋の壮観な眺めは貴重な景観構成要素であると評価し得る。当地区には明治大火後からの丸太乾燥小屋の遺構が数多く現存し、その保存が強く望まれる。</p> <p>4、つまり、当地区では集落構成と景観の核となる民家と乾燥小屋が、林業を生活基盤とする谷集落という特有の条件の下で継承され維持されてきたことがわかった。明治の大火以後も、集落の歴史と伝統を継承した中川地区の景観と民家群は、その歴史的、文化的価値が極めて高いと判断された。</p>			
【研究成果の還元】			
<p>本調査研究の成果は、報告書に取り纏め刊行するとともに (1)、関係学会（日本建築学会）において2カ年に渉り発表した (2, 3)。なお、研究成果の地元での報告会は、平成22年度4月以降に実施予定。</p> <p>1. 調査報告書『中川北山町の集落・民家・杉丸太小屋-京都・北山杉の里集落の文化的景観とその再生活用のための基礎的研究—』2010年3月（府大図書館、京都府立総合資料館、同府立図書館、京都市北区役所中川出張所、等で閲覧可）</p> <p>2. 大場修、川北敦美、田淵敦士「京都市北区中川地区の杉丸太小屋について」『日本建築学会近畿支部研究報告集』2010年6月。</p> <p>3. 佐野朱美、大場修「北山杉の里集落の景観と民家形式-京都市中川地区の集落景観の構成と特徴-」『日本建築学会近畿支部研究報告集』2009年6月。</p>			
【お問い合わせ先】 生命環境科学部 史的住環境学研究室 教授：大場 修			
Tel: 075-703-5419 E-mail: oba@kpu.ac.jp			

参考（イメージ図、活動写真等）



集落の遠景（京都市北区中川北山町、以下すべて同町）



杉丸太小屋の遠景



民家の屋敷構えの景観事例



民家の主屋及び付属小屋の外観事例



杉丸太小屋の外観事例



調査風景：杉丸太小屋の建築実測調査

